
贖罪

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贖罪

【コード】

N8648K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

ほんの些細なことから、怒りが増幅されていく。

タイ焼きを買おうと並んでいた。

大好きなタイ焼きはオーソドックスなものがいい。140円だ。一つずつ蓋をして焼くのは、他の店では知らない。うまいからいつもすごい人が並んでいる。

やっと、僕の番になって、代金を払う直前、隣から「私我先」

と言って僕の分を取ったのは、40代くらいのおばさん。しかもラストのタイ焼き3個だった。

「違うでしょう。僕だよ」

「いいえ、貴方は東から来たけど、私はずっと店内にいたの」

「嘘でしょ、いなかっただはずだ」

「いいえ、いました!」

店のおじさんは困り切っていた。

「私は遠くから来てるんだから、今日は私に買わせて」

「そんな、僕だって久しぶりに来たんだ」

「私は山形から来たの」

すると、店のおじさんは

「お兄さん、折角山形から来てるんだ。今日はこの人に譲ってやって」

くそつと思っただが、仕方ないかと思い、僕は店を後にした。何だか腹立たしいのがおさまらず、僕はコンビニに入った。ビール2本とチューハイ3本、つまみにおでんを買った。

すると、さっきの女性がコンビニの外を歩いている。途中、近くの女の人と話をした後、去って行った。

「ひょっとして、山形からなんて嘘じゃないか」

そう思うと、益々怒りがエスカレートしていく。

「くそつ、これだから、中年の女は嫌いだ」

僕は、さつき話していた女の人に聞いてみることにした。

「すみません、先程話していた方は近所の方ですか」

「あなたは？」

「いや、昔世話になった人に似ているので」

口からでたらめがスラスラ出てきた。

「あれは、ご近所の沢村さん。そのマンションに住んでるわ」

「そうですか、ありがとうございます。名前が違っていたなあ」

「そうなの、残念ね」

僕は煮えくりかえるほど怒っていた。糖分が足りないからなのか。持っていたビールを1本開けた。思い切り空きつ腹に沁み渡った。そして、公園でおでんをつまもうとベンチに座ると、べつとりと泥で汚れていた。誰かが靴で上がったのだろう。新しいズボンがめちやくちやだ。僕の頭の中で何かがはじけた。

「こういう常識を知らない人が多すぎる。この世の中は間違ってる」
ビールは2本目になった。近くをボールが転がって来た。俺は拾い上げると、

「返してー」

と子供が言う。違うだろう、俺は拾い上げたのに、返してだと？
途端にボールを蹴り上げた。子供のボールはフェンスを飛び越え、どこかに行った。

子供はあわててボールを取りに走って行った。一瞬、おびえた目をしたのを見て心がすつきりした。最初からこういう態度で接すればよかったのだ。いい人ぶると、人はそこに付け込んで来る。いつもなら、外で飲み食いもしないのに、おでんを食べ、ビールを飲み干し、チューハイを開けていた。ビールの缶も袋に入れずに、塵箱に放ってみた。入らなかった。面白くなって、塵箱を蹴りあげた。倒れた塵箱は、ゴミが散乱したがそんなことはどうでもよかった。近くでいちゃついているカップルも腹立たしかった。

「おい、お前ら、こんなところで大っぴらにいちゃつくなよ」

「帰ろっ」

と高校生の男が彼女の手を取った。

「おいおい、あわてて帰るのかい。どこへ行くんだい？ ホテルかなあ？ それとも彼女の家かなあ？」

二人は怖がるように逃げようとする。そうされると、ちよっかいを出したくなる。

「ちよつと待てよ。彼女と話をさせるよ」

女子高生は恐怖で目を吊り上げていた。怖いものなしの世の中だ。追いかけて彼女の手をつかんだ。

「やだやだやだあ」

男子高校生はがむしゃらにぶつかって来た。俺はフットワークが軽い方だから、軽く蹴っ飛ばした。すると、男子高校生の鳩尾にもろに入ったようだった。

「ぐぐーっ」

と言って、男は倒れた。女子高生はギャーギャー騒ぎだした。あわてて、ほほをはり倒した。公園で二人が倒れて、いささかヤバいと思いだした。しかし、異様にのどが渴いて、もう1本チューハイを飲んだ。もう、かなり回ってきたのが分かる。

ふふふ、鼻で笑いながら二人を見ると、女の子が男の子に縋りついている。

「弘樹、弘樹。返事をして！」

いつまでのびてやがると、チューハイを飲みながら公園を出ると、あのタイ焼きを買った女が走って来た。

「洋子、どうしたのー」

女はマンションから娘たちの様子を見た様だった。俺のことは誰なのか分かっていないようだった。

「あいつだ、あいつが諸悪の根源だ」

そう呟くと、持っていたチューハイの缶を思い切り女の額にぶつけた。

「ざまあみる」

女は額をぱっくり割られ、血が吹き出していた。目を開けたまま倒

れて、女子高生は狂ったように叫び出した。

近所の人たちが彼女の悲鳴を聞き付け、飛び出してくると、その惨状に驚き、警察に通報したようだった。俺は酔っていた。みんなが俺を指さして怒鳴っていることに腹が立ってきた。

「うるせえ！」

警官は4人はいた。なんで、こんなにいるんだよと、叫びながら俺はおかしくてたまらなかった。大笑いしながら、近くにあった石を警官に放ってみた。見事に当たった。警官は警棒を取り出して、他の3人が飛びかかって来た。

「止せよ！」

「おとなしくしろ！」

「俺は何も悪いことはしてねえよ！」

「うるさい！」

シートに巻かれた僕は、翌日テレビに映っていた。1日拘置所で寝ると、翌日知らされたのは酔って騒いで男子高校生の命を奪ったこと。さらに、女は20針も縫うほど額が切れていた。娘は片目が失明の危機となった話だった。

僕はおとなしい男だと、同級生はみんな話していたが、そんなこと何の意味もなかった。僕の両親は仕事を辞めて退職金を、死んだ被害者の両親と女の親子に払ったが許されるわけもなかった。そして、全くその額も足りなかった。家を処分し、姉の婚約は解消となった。

判決は懲役18年。

一人の人生を消し、被害者の顔や目、そして心に傷跡を残した。さらに、30年共稼ぎで働いていた両親を無職にし、退職金を使わせ、家を無くさせ、姉の人生も狂わせた。

思えばタイ焼きから始まったのだ。

僕に同情など誰もしてはくれない。誰も許してはくれない。

当然だ。自分で自分が許せない。

18年たつても、僕にはもう帰る家もない。
待ってくれる人も。

僕はそれでも生きていくのか。

ああ、神よ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8648k/>

贖罪

2011年5月20日16時55分発行